

〔散木集註〕たもとごは稻名なり、但つねにはちもとごといふを、たもとごともいふにや、此集にもちもとごとかきたるもあれど、末の補しぼるによせて、たもとごよめるにもやあらん、五音かよひたれば、ちもとごをたもとごよみなせるにもや、此人のうたには、其例おほく侍り、

〔古今著聞集^{十八}〕俊頼朝臣秋のすゑつかたに、たなかみといふ所へ罷たりけるに、いねをかけたみたるを、あればなにといふいねぞととひければ、法師子のいねなりといひける、又あしたに、きのふの法師子のいねにて、御みそうづとて、くはせたりければよみ侍ける、きのふみし法し子のいねよのほどにみそうづまでになりけるかな

紫芒稻
〔草木育種後編^下〕紫芒稻^{松江府志} 常の稻を植る法の如くなるべし、葉紫黑色なり、勢州にて此葉をとり、紫色の染料に用ゆといふ、又糯米にて芒なきものあり、火焼糯米^{授時}といふ、又芒あるものを長鬚糯米^{同上}といふ、

岡稻

〔本朝食鑑^{穀一}〕稻
種圃者曰^{オカ}穂、又稱岡稻、俱不宜、惟民食可足、
〔清良記^{七上}〕五穀雜穀、其外物作分號類之事

畑稻之事

- 一畑早稻 一野稻 一薄色 一野餅 一毛黒^{ダウゴ}似^{タリ} 一毛白^白似^{タリ}
- 一畑我社 一畑法師 一畑定法師 一野けは 一野ざらし 一野赤餅

右十二品いづれも白米也、苗にするは、三月初より次第に田稻のごとく、實植は畑を能打起して溝をかき、先へ糞をかけて種子を蒔也、土はおんちよし、眞土其次、きろは悪し、切々中をけづり、草を引事専也、草に痛む稻なり、